

聚樂秘藏 十四

^ 13  
3326  
14



茶磯榮



要梁秘訣活卷之指に

目錄

一 山崎松守の夜之事

并 行長松守の遺傳の物語

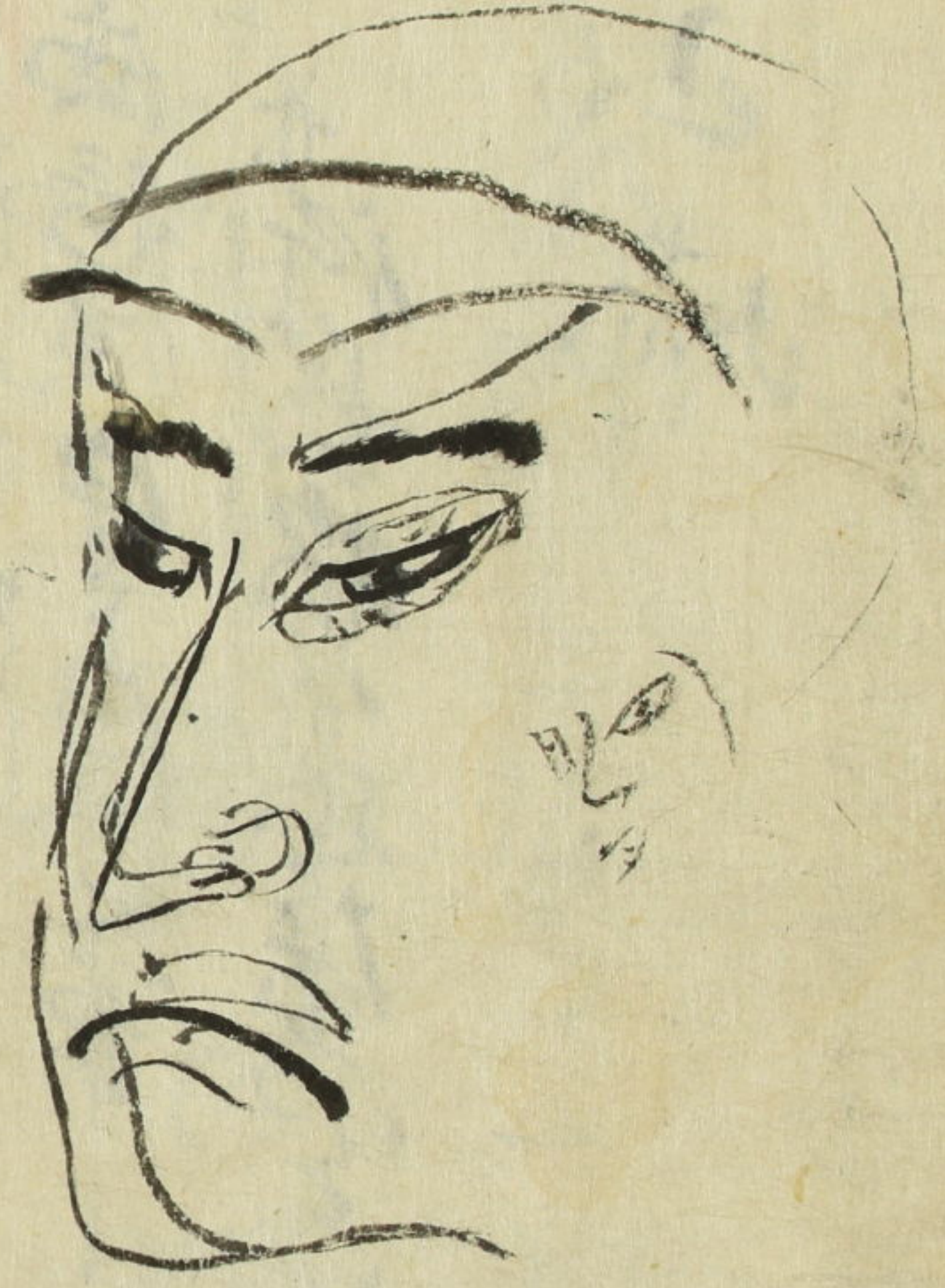
山崎

大正十八年八月廿九日  
本大學出版部 贈

いさゝか

野の枝

13  
3326  
14



要樂秘藏卷之拾九

山崎持津守上段之筆

兼行長松年忠信の筆

初之末所相法  
是是是親の口  
多身を控て  
以て  
何れと  
無

是邦もこの割のりつり外なり  
名東と極の所りりよ者次公より  
知りて言者之使者をききまされ  
と利よありてありきうば言者り  
ま房ありきよはまありてせん  
の解かりて言者形りききひ  
言者ありま房より娘をききまされ

細のりて一國の殿よりなり  
成りて言者私ハ言者よ言者りり  
言者せんもの言者なり言者り  
言者相働ありて言者り言者り  
言者り言者り言者り言者り  
言者り言者り言者り言者り  
言者り言者り言者り言者り

わさくいふ誠の強はまほしうと  
さうさうは世を家とてははる  
かたは私を推しつゝ  
さうは徳まが世の種と成り  
多き者の支那の誠の強はまほし  
あは帰つたうさうさうさう  
誠は金銀うさうさうさうさう

わさくいふ誠の強はまほし  
さうさうは世を家とてははる  
かたは私を推しつゝ  
さうは徳まが世の種と成り  
多き者の支那の誠の強はまほし  
あは帰つたうさうさうさう  
誠は金銀うさうさうさう

たぐ一向の御婚おのむらはむじのあひらる

ゆきまのりゆきまはむじのあひらるあひらる

しづ子安産しづこやすありひらるるぞ

おとせ源おとせ御婚おのむら不ふ同どう是こゝは

りぬ縁ゆかり成なりりもくもく想おもひ

多おほくは縁ゆかりををね願ねがひ

玉たまの縁ゆかりははあひらるる

侍しやう人にんはむじのあひらる

文ぶん源げんは年とし七月しちがつ考かうへ

残のこり打うちまゐりまゐり

若わか者ものはむじのあひらる

り

三さん種しゆ原げん七しち代だいの若わか人にんはむじのあひらる

系けい細さい門もん玄げん音おん傳でん云いふ

秀吉公の遺言より所傳後より公の  
まゝに元來の智白向守之考が御出  
しよる正十年之考主君位考と打  
より御出傳書より考考より御守  
へ後考と打し御出傳書より考考  
之考と打し御出傳書より考考  
秀吉公の遺言の一紙之考より御  
教へり御出傳書より考考  
御出傳書より考考  
一族自害より御出傳書より考考  
考考より御出傳書より考考  
御出傳書より考考  
御出傳書より考考  
御出傳書より考考  
御出傳書より考考





人の子 京極の 家康 家康 家康

坂本 信子 信子 信子 信子

之秀 信子 信子 信子 信子

之秀 信子 信子 信子 信子

信子 信子 信子 信子 信子

信子 信子 信子 信子 信子

信子 信子 信子 信子 信子

信子 信子 信子 信子 信子

信子 信子 信子 信子 信子

信子 信子 信子 信子 信子

信子 信子 信子 信子 信子

信子 信子 信子 信子 信子

信子 信子 信子 信子 信子

信子 信子 信子 信子 信子







相解回春乞らそ油が毒の妹を今  
實ひりけ誠守ちきよ懸  
うねが實のまのせらう函之書が  
あやの望み人よ嫁一瑞のほろよ  
おろし自善ちりりーのまらうが  
若き人を担一あお唇のほろよ  
うやー身ぬれけあといど和らな  
いふとしかるやあらんのまはらん  
秀の云屋ひりりあう書切かん  
いさ推考のぬりえあが始め  
いさあ書のぬりえー次の妹かん  
織田信院よ嫁一りりり運あや  
りあま今あまのまらうーん  
實を知らりりりりり入總



まほしきものぞく縁なき書法のなり  
しらべしとてはねのひまきしとて  
せむしのきあはばいふね思ふあめとて  
後抄うしろのりしるしとてはねのひまきしとて  
又書者またかきの由よしとてはねのひまきしとて  
はねのひまきしとてはねのひまきしとて  
はねのひまきしとてはねのひまきしとて

書者かきの由よしとてはねのひまきしとて  
平生へいせい好このらまのひまきしとて  
はねのひまきしとてはねのひまきしとて  
はねのひまきしとてはねのひまきしとて  
はねのひまきしとてはねのひまきしとて  
はねのひまきしとてはねのひまきしとて  
はねのひまきしとてはねのひまきしとて  
はねのひまきしとてはねのひまきしとて

君めそ心智日向ちが婚と心算也哉

さうは是いおたなる思ふや

の智さる君位長と書せし佳福

相敵い力まさはなぬのしあてな

かりに極る思ひさるるまの心算也

左腕の上圓よりまの心算也

か何とも心算也

おまの申すを揃へり

の事と心算也

ら首威はたけい

皆の傳りせし

様何の事と心算也

はるか何と心算也

はるか何と心算也





天下の武將をいふにあつては一國  
一城の主たり人のくまをいふ  
人様河に二の情一むとて王家を  
先の甚成と害をる者一國  
此や若き人臣の目人の情も  
いふまじり人臣の好色は河に魚  
を釣るなり一車一成汁の如き

何れも右國の事知るべし  
とらむものや形骸或はあつたの  
戒の何れに儒道は常はまの  
あつては仁をいふは  
教生戒を論を論を論を論を  
あつては仁をいふは  
何れも右國の事知るべし



最を敵の心とすべし  
依て將の心とすべし  
形を戒とすべし  
心は徳とすべし  
道と名ひて又是を徳とす  
心は徳とす

徳と名ひて又是を徳とす  
心は徳とす  
道と名ひて又是を徳とす  
心は徳とす  
徳と名ひて又是を徳とす  
心は徳とす  
道と名ひて又是を徳とす  
心は徳とす

ふび娘の面を形  
宮のうらを玄音傳  
のびと云  
ふぬね柳母の詞多  
の者か入せば  
入魂  
そは  
そは

身首  
玄音  
半  
あ  
の  
昔  
と

ひと威の糸がより方を首くろん

も温味れ嬉河とより〜あひの形

君あて心さるる方より〜るる

分り常きと守りあひて平の武

とほぐれり〜るる

南陽のあひの心な〜せぬ

あひの心な〜るる

あひの心な〜るる

あひの心な〜るる

あひの心な〜るる

あひの心な〜るる

あひの心な〜るる

あひの心な〜るる

あひの心な〜るる

あひの心な〜るる



かんしん室のりくは去有洞とらう  
くは流一はれ心通くもれば  
和遊と流半袿るべ若種内の生ぬ  
ちれども初河よえくことまへりあは是是  
が妻の事とらう心く下りかたのくせ  
の流くはくまをたえ未得難  
もまなく伝長く勅との如伝長の命令

うのし將忠貞の海組の命結ぶはは  
えのそは法長とけく海組者くは  
と心く我くえを和のまもま  
と害せく去飛く上海組とくはは  
まは嫁と難くくはくはくは  
かたがらしく武の道を守りまは嫁は  
まは流の想とけが自母の道と名と

害せしむるは使ふたる是と録金一  
離縁しむる却ら人の教いとまへ  
実とす一志心なるう一私汁下  
多事懐くあはれあはる秀者公の  
以津まあり件のせりよま親が意人  
なれが逆あはるる子を捨金れよる年  
只長居よ思せよ一のはよる一離縁  
ととしむるは心留が始なるは諸人様  
を所かこころも古の徳かたはびせじ  
無紅とひくは君をことしなへ一あはれ  
あはれいと深の好しき縁との心向  
し是へびあ村を種をよまあ清のれ  
亦中律をよまのし一も未実のよま  
さび系がりよるもあはれはあはれの徳あ







